

虎居城跡の一般公開を終えて

平成18年7月鹿児島県北部は集中豪雨に見舞われ、宮之城市街地も甚大な浸水被害を受けました。国土交通省はこのような災害を防ぐために川内川激甚災害特別緊急事業として、虎居城跡を分断する分水路の建設を計画しました。

今回の虎居城跡の発掘調査はこの分水路建設工事で無くなる部分の調査を行い、記録保存して後世に残していこうとするものです。発掘調査は、昨年度は県立埋蔵文化財センターとさつま町教育委員会が、今年度は県立埋蔵文化財センターが実施しています。

虎居城は三方を取り巻く川内川が堀の役目を果たす天然の要塞の地にある中世の巨大な山城であります。調査の結果、敵の侵入を防ぐために築かれた土塁や堀、曲輪への入り口となる虎口、柱の一部が残った建物跡をはじめ、中国製の磁器や木製の椀等が発見され、当時の山城の状況が推定できるほど遺構もしっかり残されていることから、今後の研究に大変貴重なものとなっています。

埋蔵文化財センターでは、発掘調査の成果を多くの方々に知って

もらうため、昨年11月に引き続き、7月4日（土）に現地説明会を実施いたしました。当日は天候にも恵まれ、町内外から500余名もの見学者が訪れ、500年前の郷土の山城に思いをはせていました。

（記事提供

鹿児島県立埋蔵文化財センター）



鹿児島県立埋蔵文化財センター職員の説明を受ける見学者

■虎居城について

鹿児島県には中世の山城が80箇所以上存在していたといわれています。中世の山城は、山や谷の地形を利用し、守りやすく攻められにくい場所に造られています。山の上を平坦にして屋敷などの陣を構えたり、谷をさらに掘りこんで防御のための堀を造ったりしました。

虎居城は、平安時代末期の祁答院郡司大前氏によって築城されたと伝えられています。その後、祁答院地方を治めた鎌倉時代の渋谷氏、安土・桃山時代の島津歳久・北郷氏の居城となりました。

北郷氏が都城領主として都城に復帰したのは、地主として島津忠長が入封し、以後、宮之城島津家の居城となります。江戸時代の元和元年（1615年）の一国一城令により廃城となるまで、400年余りにわたり山城として機能します。

資料提供

虎居城発掘調査現地説明会資料

宮之城町史・川内市史上巻

旧記雑録

さつま町教育委員会文化課

■発掘された遺構の紹介

今回、鹿児島県立埋蔵文化財センターの協力で虎居城跡地で発見された遺物や遺構を左頁に紹介します。

紹介文面の用語説明

遺構

昔の人々の生活によって地面に掘りこまれたり、造られたりしたもの。例えば、住居跡、溝跡、炉跡があります。

遺物

昔の人々が使った道具などです。石器や土器、木製品、金属製品などがあります。

曲輪

役割や機能に合わせて、城内を区画した場所のこと。

土塁

敵の侵入を防ぐために、土を小高く盛って造った土手のこと。

堀

敵の侵入を防ぐために掘られた溝のこと。容易に越えられない幅と深さを持っています。

いこう いぶつ これまでの発掘で発見された、主な遺構や遺物



しお じょう
塩の城の上では、2,000近くの穴が見つかりました。これらの多くは、建物の柱の跡です。長い年月の間に何回も建物を建て替えたものと思われます。
※塩の城：虎居城跡内の曲輪くるわの名称の一つ



くるわ こぐち
曲輪の入り口を虎口といいます。塩の城の虎口は、直接曲輪に入れないように、下から登ってくると90度曲がって入る形をしていました。



くるわ から
曲輪の周囲には、溝（空堀ぼり）が作られていました。深さは約1～2mあります。



写真は、うるしのわん碗で、木まの部分は溶けて、うるしの膜だけが残った状態で見つかりました。堀の中からは、農具やげたなどの木器が出土しました。



写真は、竹で組んだ土留めしがらみで、し篋かみといひます。塩の城の下で見つかりました。この他にも堀の中から、六角形や八角形に削られた柱の根元が見つかりました。



かじ るつぼ
鍛冶に用ゐれる埴塼はつたんが8点出土しました。現時点では何を作っていたかは分かりませんが、今後の調査で解明していきたいと思ひます。



木札に墨で字を書いた木簡もっかんが堀から出土しました。「南無」という字が読めます。

資料提供

鹿児島県立埋蔵文化財センター